子どもとの日々のひとり言

菊地　知子

「ババドビドゥー」。呪文よろしくそんな言葉を繰り返し叫びながら、彼は会議室から広い廊下へ出てきた。出てきた、という表現はあまり適切ではない。彼の意志でないことは明らかだ。顔を涙と鼻水とよだれで高湿度に保ちながら、二歳台後半とおぼしき彼は、母親に〝連行〟されてきたのである。「もう。いつでもこうなんだからっ」と、憤懣やるかた無しといった風の母親は、「ババドビドゥー」に負けじと、「だから、ママはシートのところでは見れないの。みんなママと離れてシートの上で見てるでしょ」とたたみかける。彼の泣き方は、さらに激しさを増す。

その日私は、友人に頼まれ、親子向けの催しの会場整理を手伝っていた。立派過ぎる程の公共施設をまるごと会場として、劇や紙芝居、その他のパフォーマンスを、二日にわたって一挙上演するという催しである。その日の午前中は、その催しとは全く無縁の、地域行事に参加していた。「何が悲しくて、昼食も取れぬままこんな〝かりだされ人生〟を送っているのだろう」と我とわが身を呪いながら、次なる会場へと急ぐ。大幅遅刻は必至であるが、おそらくは既にすべて

事足れりであろうから、あわよくば授乳室兼乳児の為の部屋で、「あおくんときいろちゃん」でも広げながら気ままにやろう、などと目論んでいた。だがしかし、目論見通りになどいくべくもないことは、会場に着くや明らかになった。会場は、親子連れでごった返している。入るべき部屋に入れば、必ずや救いがあるということを、子の手を引いて彷徨える母親（あるいは父や、じじばば）に、一刻も早く伝えかつ正しき場所へ導くという任務が、今を遅しと私を待っていた。正直なところ、この光景に腰が引けたが、これを乗りかかった船というのだろう、やや〝やけっぱち〟で、任務に就いた。収容人数五十名かそれ以上とおぼしき会議室の前で、もうすぐ始まろうという学生サークルのパネルシアターへと人々を誘い、じきに会場内の照明も落とされようというときに、件の母親が、小さな男の子を羽交い締めにして引きずるような格好で、廊下に出てきたのである。

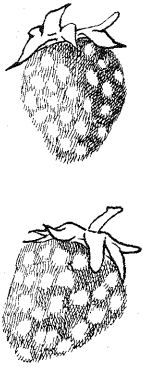
そのような状況下で、男の子の発する「ババドビドゥー」が、「ママと見るー」であることは、わかったところでさして自慢にはなるまいし、確認し合える相手もなく、原文に濁点を付けて実際に呟いて確かめるにとどめた。そして、その場は会場係として職務を全うすべく、やおら二人に近づき、穏やかに「お膝で見せてあげてもいいのよ」と切り出し、「お母さんと離れて前の方で見たい子はそれでもいいですよってことだから」云々と続けた。しかし、母親はかえって頑なに、私にではなく男の子に向かって、「お友達は前のシートに座って見てねって、マイクの人が言ってたでしょ。みんなちゃんと座って見てたでしょ。ちっちゃい赤ちゃんじゃないんだから、ちゃんと一人で座れないなら見なくていいです」と、挙げ句はですます調で言い放ち、「どうするの？　見なくていいのね？」と追い打ちをかける。（そりゃ見たいよねえ、かっこ、ママのおひざで）と心の中で呟き、劇やお話を楽しみにして母子でわざわざ出向いておきながら、おそらくは何一つ見ずに帰るであろう二人を予感した。

会場内には、連れて来てくれた大人の方など一顧だにせず、子ども用に敷かれたシートへと転び乗る子もいれば、やや後方で、母親の膝の上で見ようという子ももちろんいる。その母親が言うように、彼は〝ちっちゃい赤ちゃん〟ではないかもしれないが、傍目にはまだ十分に小さく、膝の上はまだまだお似合いだ。出し物を、親子で楽しむことがこのイベントの第一義であるから、マイクの人、すなわち進行役が、そうとやかく細かいことを言ったとも思えない。「みんな」という言葉で括れるほど、会場内の観客は一様ではないはずだ…異を唱えることに何の困難もないくらい、母親の言葉ひとつひとつは、説得力に欠けている。それでも私はそれ以上、この母親に改心を迫ることをよしとしなかった。自分のお節介を愛情と呼ぶのはおこがましいし、好意というとどこか揶揄的な臭いが漂うが、いずれにせよ、そういった他者から発せられるものに呼応し、受けとめる気持ちを今、相手の中に見い出すには、この場はむずかしいと感じたからだ。代わりに私は、いつしか母子が座っていた通路のソファに一緒に座り、男の子の膝や腕などを少しずつ触りながら、指遊びや手遊びなどをして呑気に過ごした。いつまた自分の手や足に侵入してくるやもしれぬ私の指先を熱心に目で追いながら、男の子は何度も「くっくっく」と喉の奥で笑い、そのうち「キャッキャ」と声を上げて笑い出した。子どもの膝をくすぐるようには、母親の心はくすぐれないことについては、私はいささか諦観気味であったが、たとえこの母子が、この後自宅へ直行したとしても、笑顔で過ごす時間に多少なりとも与することができたことは、やはり嬉しいことであった。

少し離れたところでこの出来事を見るともなしに見ていた、やや年配の会場スタッフの女性二人が、母子の立ち去ったところに現れ、「一緒に見てあげればいいのにねえ。自分で自分を縛っちゃうんだわね、ああいう人って」「せっかくわざわざ連れてきたのにねえ」と、さも勿体ないという口調で言った。「ほんとうに」

と答えつつも、実のところ私は、この母親を非難する気持ちなど、自分が一向に持ち合わせていないことに気づいていた。母子の日常の背後にあるものは全くわからない。それでも、「いつでもこうなんだから」との言葉が垣間見せるように、いつもいつもママにくっついて離れないであろう二歳児を、陰に籠もって虐待することもなく、親子のためにとかなり作為的に仕組まれたこんな場に、いそいそと出てきた彼女を、責める気になどなれなかった。

自然発生的に子どもが集い、遊べる場は、よほどラッキーな例外を除いては、悲しいかな、今の日本には無いといっていい。これは、こと就園前の子どもにとっては致命的である。公園デビューという、ギョーカイ用語の如き大仰かつ侮蔑的な言葉が罷り通ることで「公園に行けば誰かが居るかもしれないしー、一緒に遊べるかもしれないねー」などと思える屈託の無さは、とっくに過去のものになってしまった。もとより路地裏で気ままに遊ぶなど、望むべくもない。あったところで、「路地裏デビュー」なる言葉でがんじがらめにされるのがオチである。乳幼児期の子どもにも、それに寄り添う者にも必要不可欠であるはずのコミュニケーションの場として、育児サークルの類に活路を見出す流れは、かなり理のあることと思うが、既成のそれにアプローチすること自体、行き場のない親にとって新たな壁となりうるのだと、育児相談を仕事とする友人に聞いて、さもありなんと思った。さらには、かなり自然発生に近い形で伸びやかに活動をしていたサークルで、連絡係に端を発したはずのリーダーのバトンタッチが困難になり、何処ぞのＰＴＡよろしく、どろどろの人選劇を繰り広げているといった話も、人為的に作られた集まりの宿命というものかもし



れないと、妙に納得がいってしまう。

それでも、と私は思う。子どもとの生活に、子ども、大人を問わず大いに巻き込みかつ巻き込まれて過ごすことこそが、子どもたちの嬉しさや優しさを育ててくれる、と。右のような状況に限らず矛盾はおそらく多々あるし、子ども同志の日常的な「やった、やられた」、時としてそれに伴う他者への憎悪、憎悪するわが身への嫌悪感、心ない噂話に翻弄される経験など、怯む要素を挙げ連ねればきりがない。それでもやはり、自分が何とかしなければならない子どもとの日々の局面で、否、正確には、自分だけで何とかしなければならないと思い込まされているあらゆる局面で、羅針盤を持ち得ず、ひとり方向を見失っていくよりずっといい。自分が、それと意識しているか否かにかかわらず頼りを持たぬ存在である時、理解しがたい頑なさで自らの心を被ってしまうことは、決して稀ではないことは、我が身に置き換えてもわかる。多くを一人で背負っていると思うが故に、脆弱な心で気丈に振る舞い、どうでもいい類のことに躍起になる。親切も、心配も、ましてや叱責も、心に届かない。他者とのあるいは他者からのあれこれを、「よかったね」「嬉しいね」と共に受けとめることなく過ごせば、傍らの子どもも又確実に、愛情をキャッチする能力を低くする。

欲を言うなら、子を育てる世代であるか否か、子どもに関わる仕事をしているか否かにかかわらずたくさんの人を巻き込んで、「応援すること・されること」が緩やか包囲網をつくり、子どもと、子どもを育てる人々を包み込めれば、とてもいいと思うのだが、そこには遠く至らずとも、やはり、ひとりひとり小さな連携から地道に始めるしかない。子育て代行と限りなくイコールであるところの「いわゆる」子育て支援の大合唱からは、少し離れたところに身を置きたいものだと願いながら、たかだか月に一回程度だが自宅を開放してささやかな文庫を始めたのも、小さな子どもを持つ親に、楽しく子育てをしてほしい、その楽しさを共

有させてほしいという思いからであった。まさしく支え支えられてきた、私自身の子育ての同行者ともいえる友人を相棒に、集いやすさを考えて「ひだまり文庫」と名乗り、絵本を読んだりはするが、彼女も私も、多少活字中毒の気はあるものの、無類の本好きというわけでは決してない。絵本は確かに多くの示唆を与えてくれるし、時に心底楽しいが、絵本を読むことだけで非常に多くの事が解決するように考えるような一部の流行には、懐疑的である。絵本はいわば口実で、なるべくのどかに、気ままに、お茶を飲んだりお喋りしたりできることを、むしろ大切にしている。育児を担うおばあちゃんが、孫を連れて集ってくれることがあることも、世代の枠を広げてくれてありがたい。小さき者への愛しさも、ひとしおの感がある。

「ここに来る子たちは実は、ここに来なくても大丈夫な子たちばっかりなんだよねえ。お母さんたちも然りだけど」と、自虐的に矛盾をついて二人で苦笑しつつも、無邪気に「楽しかった」「気持ちが晴れた」等と喜ばれることを喜びにして、また二人で張り切って、互いの暦の空きを探すのだった。

子どもの傍らで生きる生活のどこかで、その子を見、知り、抱きしめたり食べさせたり、たまには本を読んだり、その子のために泣いたり怒ったりする人が、なんだかんだ自分以外にもいると知ることは、他者との多少の見解の相違など何のその、自分もその子もその〝応援〟を甘受して生かされていると実感することにつながっていく。そして自らも、なぜか俄然はりきって、子どもや子を育てる者の、楽しい気持ち、嬉しい気持ちを育むことに、何とか一枚加わろうとするようになるのではないだろうか。そんな連鎖反応に今、密かな期待を持っている。

（松戸・ひだまり文庫）